

天文学とプラネタリウム

第134回



今月のお題

宇宙の演劇



ビッグバンで始まり太陽の死で終わる、そんな演劇に出会いました。宇宙史に重なるのは、ある家族の日常です。

高梨直紘 (東京大学)

平松正顕 (国立天文台チリ観測所)



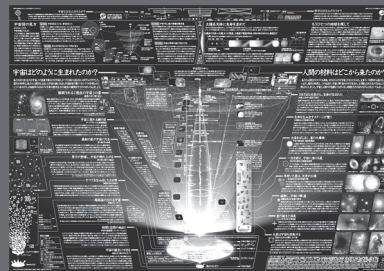
www.tenpla.net

とある劇団のプロデューサーさんからメールをいただいたのは今年3月。宇宙をテーマにした演劇のアフタートークへの出演依頼でした。曰く、「人が生まれてから死ぬまでの約100年と星が誕生してから消滅するまでの約100億年という時間を、時報を合図に団地に暮らす一家と星の一生を重ねて描いた演劇作品」とのこと。演劇はあまり見たことのない私なので、期待半分不安半分でお引き受けしました。

当日、会場に入ると円形のシートが敷かれた舞台を取り巻くように階段状の座席が設置されていました。暗闇の中で「家族」がリズムカルに歌うことでビッグバンが起き、主人公の女の子が誕生日を迎え、月が地球から離れていき、太陽が寿命を迎えて地球上の生命が終わりを迎える。ちょっと意図的に荒唐無稽なあらすじ紹介をしようとするばこんな感じででしょうか。宇宙の誕生、地球の自転と公転、光速度を超えられないと謳う相対性理論、赤色巨星になる太陽など、宇宙好きの方にはなじみの深い概念や現象が家族の日常に重層的に織り込まれています。絶えず流れる時報のリズムと、時空間を縦横無

尽に駆けまわりながら円形の舞台上で舞い踊る役者さんたちの重なりも、圧巻でした。劇場でないとい体感できない強い印象を私は感じました。

アフタートークでは演出の柴幸男さんと対談。「天文学を研究すること」の意味やプロセス、アルマ望遠鏡の話題などで、30分の時間はあっという間でした。対談の中でいちばん驚いたのは、私たちも製作に関わった「一家に1枚宇宙図2007」を、アルバイト中にたまたま見かけたことがこの演劇を作るきっかけとおっしゃったことでした。文部科学省から全国の学校に配布された宇宙図はそこに通う生徒の皆さんだけでなく、意外な波及効果をもたらしていたのです。柴さんからは「天文学をこういう形で使うことが研究者にはどう思われるのか?」という不安のようなものがあつたそうですが、「私としては大歓迎」ということをお伝えしました。科学の文脈だけでなく、演劇や音楽や絵画やその他さまざまな形で「宇宙」が日常に溶け込み、人と宇宙のいい関係が生まれていくことが私たちの活動の大きな目標の一つですが、それがまさに目の前で展開していくのを見ることができて非常にうれしかったというのが正直な感想。も



演劇『わが星』の着想のもとになったという「一家に1枚宇宙図」(こちらは2013年版)。その情報量の多さが、多面的な読み取り方を可能にしているのかもしれない。

う一度いろいろ思いを巡らせながら楽しみたい、そんな演劇でした。

ままごと『わが星』ウェブサイト

▶ <http://wagahoshi.com/about/>

東京都の三鷹市芸術文化センターで公演。
6月14日まで。

134

134